

執筆者一覧

猪熊 恵子（いのくま けいこ） 東京医科歯科大学教養部准教授，愛知県出身，東京大学大学院人文社会系研究科博士課程満期退学 【主な著書論文】「揺れる時間と空間：Cranford と Cousin Phillis にみる中間的領域」（『ギヤスケル論集』17，2007）／「終わらない日記，再生され続ける物語：『ワイルドフェル・ホールの住人』における語りの構造」『ザルツブルグの小枝』（共著，大阪教育図書，2007）／“The Authorial Dominance and Anxiety: A Reading of *Martin Chuzzlewit*”（『リーディング』27，東京大学英語英米文学研究室，2006）／「ネリーとは誰か——『嵐が丘』における名の研究」（『ブロンテ・スタディーズ』4.3，2005）／“The Epistolary Discourse in 19th Century Novels: *Bleak House*, *Jane Eyre* and *Cranford*”（『リーディング』26，東京大学英語英米文学研究室，2005）。

鶴飼 信光（うかい のぶみつ） 九州大学大学院人文科学研究院准教授，愛知県出身，東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学 【主な著書論文】「呼びかけてくる言葉——Virginia Woolf の *Between the Acts* における分断を前提とする融合」（『文学研究』107，九州大学大学院人文科学研究院，2010）／“Catherine Earnshaw as the Spine of a Book: The Duplication of Self in *Wuthering Heights*”（『文学研究』103，九州大学大学院人文科学研究院，2006）／「オスカー・ワイルド『ドリアン・ 그레이の肖像』における能動性と受動性の交錯」（『文学研究』100，九州大学大学院人文科学研究院，2003）／「E. M. フォスター『インドへの道』の異と同のフラクタル」（『英国小説研究』19，英国小説研究会，英潮社，1999）／「『嵐が丘』の無意識の悪漢」（『文学研究』95，九州大学文学部，1998）。

加藤 匠（かとう たくみ） 明治大学商学部兼任講師，埼玉県出身，上智大学大学院文学研究科博士課程満期退学 【主な著書論文】「「迷い続けるひと」：ピーター・ケアリー『ジャック・マッグズ』におけるオーストラリア」（『FLC 言語文化論集ポリフォニア』1，東京工業大学外国語教育センター，2009）／「ある共同作業の痕跡——*Household Words* から読むギヤスケル」（『ギヤスケル論集』18，日本ギヤスケル協会，2008）／「まだら模様の真実の国：パトリック・ホワイト『ヴォス』におけるオーストラリア」（『テキスト研究』6，2007）／「虚構と現実の狭間で——チャールズ・ディケンズとセポイ反乱」（『桐朋学園大学研究紀要』31，2005）／“Culture”とは何か——アーノルドと文化研究をつなぐもの」（『桐朋学園大学研究紀要』30，2004）。

川崎 明子（かわさき あきこ） 駒澤大学文学部准教授，石川県出身，PhD (University of Hull) 【主な著書論文】「化学者が見る幽霊——ディケンズの『憑かれた男』」『亡霊のイギリス文学

——豊穡なる空間』(共著, 国文社, 2012) / 「ジャネット・ウィンターソンの『灯台守の話』における間テキスト性——葉を飲まなかったトリスタンとイゾルデ」(『英国小説研究』24, 英宝社, 2012) / 「聖セシリアに愛される者たち——『ダニエル・デロンダ』における音楽」『梅檀の光 富士川義之先生, 久保内端郎先生 退職記念論文集』(共著, 金星堂, 2010) / 「二重の孤独——アニータ・ブルックナーの『家を出る』の一人称の語り」(『テキスト研究』6, テキスト研究学会, 2010) / “Voicing and Silencing Madness: A Reading of *Jane Eyre*” (『英文学研究』78.2, 日本英文学会, 2001)。

武井 暁子(たけい あきこ) 中京大学国際教養学部教授, 茨城県出身, PhD (University of Aberdeen) 【主な著書論文】「*A Suitable Boy*——ラタは“suitable”な伴侶を選んだのか?」『現代インド英語小説の世界——グローバリズムを超えて』(共著, 鳳書房, 2011) / 「チャールズ・ディケンズ——エディンバラの二人の「父」」『文学都市エディンバラ——ゆかりの文学者たち』(共著, あるば書房, 2009) / “Mr. Cole is Very Biliou’s: The Art of Lay Medicine in Jane Austen’s Characters,” *Persuasions On-Line* 30.1 (2009) / “Benevolence or Manipulation? The Treatment of Mr Dick,” *Dickensian* 101.2 (2005) / “Your Complexion Is So Improved!/: A Diagnosis of Fanny Price’s ‘Dis-ease,’” *Eighteenth-Century Fiction* 17.4 (2005)。

玉井 史絵(たまい ふみえ) 同志社大学グローバル・コミュニケーション学部教授, 奈良県出身, PhD (University of Leeds) 【主な著書論文】“Educating Oliver: The Conflicting Ideas of Education in *Oliver Twist*” (『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』33, 2010) / 「国家——自由貿易の帝国のなかで」『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』(共著, 溪水社, 2010) / 「国家をく見る」快樂——『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』におけるヴィクトリア女王のジュビリーの表象 (『言語文化』11, 同志社大学言語文化学会, 2008) / 「越境する犯罪と暴力」『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化』(共著, 溪水社, 2007) / 「小説出版と挿絵」『ディケンズ鑑賞大事典』(共著, 南雲堂, 2007)。

中村 隆(なかむら たかし) 山形大学人文学部教授, 秋田県出身, 東北大学・博士(文学) 【主な著書論文】「クルックシャンクのたくらみ——『オリヴァー・トゥイスト』におけるホガス模倣」(『山形大学人文学部研究年報』7, 2010) / 「『荒涼館』」『ディケンズ鑑賞大事典』(共著, 南雲堂, 2007) / “Dickens in the Late-Victorian Context: Socio-Cultural, Politico-Economical, and Literary History in *Bleak House*, *Great Expectations* and “Sikes and Nancy”” (博士論文, 東北大学, 2006) / 「メドゥーサの肖像——公開朗読のナンシーとセンセーション・ノヴェルのヒロインたち」(『英文学研究』81, 日本英文学会, 2005) / “Ghosts and Money in *Great Expectations*” (『試論』41, 東北大学大学院文学研究科英文学研究室, 2003)。

中和 彩子（なかわ あやこ） 法政大学国際文化学部教授，埼玉県出身，東京大学大学院人文社会科学系研究科博士課程中途退学 【主な著訳書論文】『『第三の男』における監視としての語り』（『人文研紀要』71，中央大学人文科学研究科，2011）／『フォーチュン氏の楽園』（単訳，シルヴィア・タウンゼント・ウォーナー著，新人物往来社，2010）／「モダニズムの中の女王——シルヴィア・タウンゼント・ウォーナー『まことの心』におけるヴィクトリア女王の表象』『モダニズム時代再考』（共著，中央大学出版部，2007）／「遅れの意識——シルヴィア・タウンゼント・ウォーナー『フォーチュン氏の奇想』を読む』（『人文研紀要』57，中央大学人文科学研究科，2006）／「物語は踊る——『ワイズ・チルドレン』における文化の政治学」（『人文研紀要』47，中央大学人文科学研究科，2003）。

西垣 佐理（にしがき さり） 近畿大学農学部専任講師，大阪府出身，関西学院大学・博士（文学）【主な著訳書論文】『侯爵夫人』になる方法——『骨董屋』にみる看護とヒロイン造型』（『近畿大学教養・外国語教育センター紀要（外国語編）』2.1，2011）／『『ルース』にみる看護と感化力——『荒涼館』との比較をつうじて』（『ギャスケル論集』19，日本ギャスケル協会，2009）／「男が癒し手になるとき——『マーティン・チャズルウィット』にみる看護の諸相』（『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』31，2008）／“The Turning Point of the Narrative: Victorian Nursing and Cultural Aspects in the World of Charles Dickens”（博士論文，関西学院大学，2008）／「地名（CD-ROM）』『ディケンズ鑑賞大事典』（共著，南雲堂，2007）。

畑田 美緒（はただ みお） 大阪大学大学院言語文化研究科准教授，大阪府出身，京都大学大学院文学研究科博士課程満期退学 【主な著訳書論文】“Inarticulate Fear of Futurity: A Study of Dickens's *David Copperfield*”（『大阪大学世界言語研究センター論集』5，2011）／“Anxieties about Victorian Gender Ideology: A Study of Dickens's *Oliver Twist* and *The Old Curiosity Shop*”（『大阪大学世界言語研究センター論集』3，2010）／「アンガス・ウィルソン「ディケンズとドストエフスキー」』『ディケンズ鑑賞大事典』（共著，南雲堂，2007）／「イギリス女性と仕事——「女性らしさ」の神話と現在』『地球のおんなたち 2——20世紀の女から21世紀の女へ』（共著，嵯峨野書院，2001）／「『時』の囚われ人たち』『チャールズ・ディケンズ「大いなる遺産」——読みと解釈』（共著，英宝社，1998）。

松岡 光治（まつおか みつはる） 名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授，福岡県出身，MPhil (University of Manchester) 【主な著訳書論文】『ギャスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』（編著，溪水社，2010）／『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化』（編著，溪水社，2007）／『ディケンズ鑑賞大事典』（共編，南雲堂，2007）／“Slips of Memory and Strategies of Silence in *A Tale of Two Cities*,” *Dickensian* 100.2 (2004)／『ギャスケル短篇集』（編訳，岩波文庫，2000）。

執筆者一覧

松村 豊子(まつむら とよこ) 江戸川大学メディアコミュニケーション学部教授, 香川県出身, 津田塾大学大学院文学研究科博士課程満期退学 【主な著訳書論文】『女性と職業: 英国 19 ~ 20 世紀初頭文献集成』(監修・解説, Eureka Press, 2011) / 「エミリを探して——ドリス・レスリング『生存者の回想』を中心に」(『文学研究』37, 津田塾大学大学院, 2011) / 「旅立ち——『妻たちと娘たち』における成長のバリエーション」『生誕二〇〇年記念 エリザベス・ギヤスケルとイギリス文学の伝統』(共著, 大阪教育図書, 2010) / 『『ドンビー父子』』『ディケンズ鑑賞大事典』(共著, 南雲堂, 2007) / 「ディケンズにおける喜劇的祝宴と暴力——『マーティン・チャブルウィット』を中心に」『〈食〉で読むイギリス小説』(共著, ミネルヴァ書房, 2004)。

宮丸 裕二(みやまる ゆうじ) 中央大学法学部准教授, 神奈川県出身, 慶應義塾大学・博士(文学) 【主な著訳書論文】「郵便——鉄道と郵政改革が見せた世界」『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』(共著, 溪水社, 2010) / 「ロバート・グールド・ショー」『ギヤスケル全集別巻 II』(共訳, 大阪教育図書, 2009) / 「自伝的要素——分裂する書く自分と書かれる自分」『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化』(共著, 溪水社, 2007) / 「人物 (CD-ROM)」『ディケンズ鑑賞大事典』(共著, 南雲堂, 2007) / “Art for Life’s Sake: Victorian Biography and Literary Artists” (博士論文, 慶應義塾大学, 2005)。

矢次 綾(やつぎ あや) 松山大学人文学部教授, 福岡県出身, 名古屋大学・博士(文学) 【主な著訳書論文】“Gaskell’s Reactions to the Age of History,” *Gaskell Journal* 24 (2010) / 「ディケンズの歴史観——『バーナビー・ラッジ』, 『二都物語』, 『子供のための英国史』研究」(博士論文, 名古屋大学, 2008) / 「歴史記述のフィクション性と狂人——『ミドロージャンの心臓』と『バーナビー・ラッジ』」(『ヴィクトリア朝文化研究』5, 2007) / 『『二都物語』における歴史編纂——過去の暴露と現在の再構築』(『中国四国英文学研究』4, 2007) / 「過去の復元とアイデンティティー——A・S・バイアット『抱擁』』『ブッカー・リーダー——現代英国・英連邦小説を読む』(共著, 開文社, 2005)。

渡部 智也(わたなべ ともや) 大谷大学文学部助教, 兵庫県出身, 京都大学大学院文学研究科博士課程満期退学 【主な著訳書論文】“The Revenge of the Poor: ‘The Structural Relationship’ between Hortense and Jo in *Bleak House*” (『西洋文学研究』32, 大谷大学西洋文学研究会, 2012) / 「失われた眠りを求めて——『骨董屋』における「眠り」について」(『関西英文学研究』3, 2009) / “‘Is Oliver Dreaming’ Revisited: The Mystery of *Oliver Twist*” (『Zephyr』21, 京都大学大学院英文学研究会, 2009) / 「循環する眠りと歴史——『バーナビー・ラッジ』における「眠り」について」(『Zephyr』20, 京都大学大学院英文学研究会, 2007) / 『『オリヴァー・ツイスト』における「眠り」について』(『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』30, 2007)。